

書評

脊椎外科書

清水克時 ● 著

〔評者〕持田讓治（東海大学医学部外科学系整形外科）

岐阜大学の清水克時先生による『脊椎外科書』が上梓された。ご承知の方も多いと思うが、随筆なども刊行されている清水先生の文体は大変スマートであり、拝見するのを楽しみにしていたところ、書評のご依頼を頂いた。大変に光栄であり、有り難くお引き受けした。

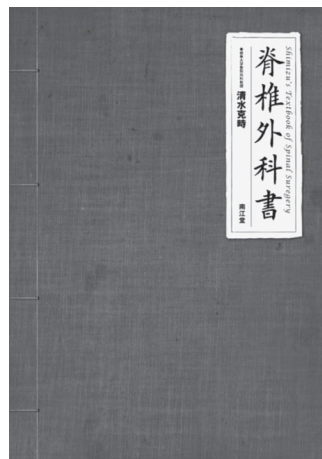
脊椎脊髄外科の教科書、手術書は国内外で多数刊行されているが、単著での企画は清水先生のご指摘のように、国内では大谷清先生の手術書以降ごく少数である。監修者、編者が企画する専門家分担執筆では、現在の最先端の知見が網羅され、コンセンサスが得られた内容でまとめられており、教科書としての役割は極めて大きい。一方、その内容・構成や書き方も編者から細かく指示されることが多い。このため、脊椎脊髄外科を学び始めた医師には格好の勉強の素材となるが、ベテランの医師からは『面白味が少ない、どの本を読んでも似ている』というご意見もしばしば聞く。

本書は極めて個性的な書であり、全147ページには、京都大学、岐阜大学で教員、研究者として活躍され、今なお、脊椎脊髄外科医として第一線で臨床活動を継続されている清水先生そのものが投影されている。先人の業績を尊

重しながらも、清水先生が自ら経験し、考え、感じたことを大切にし、一般的な脊椎脊髄外科医の意見と異なることも、自らの信条の軸を変えることなく、見事に書き上げている。面白い小説は一気に読み切ってしまうものだが、本書も同様であった。

本書の総論を読むと、患者の病態把握と診断、治療方針決定、基本的な手術手技や後療法に関して、清水先生が若手の医師に直接語りかけている場面が頭に浮かんでくる。この手術書は初心者向けだろうと思い、各論の部に移ると、典型的な手術手技や結果の提示は少なく、この書の対象は誰なのかと一瞬戸惑う。

インストゥルメントの破損・脱転例、感染例、全身状態の悪い透視症例、術前の責任病巣の見落としによる術後麻痺進行例、術後の予想外の悪化例などの紹介が続く。本書が脊椎脊髄外科の手術のあるレベル以上経験している医師達を対象とし、彼らがいずれ遭遇する難解な手術の場面を丁寧に解説し、その解決法を示していることに気付く。1例ごとの症例の紹介は、芝居的一幕、一幕を見ているような臨場感がある。予想通り、清水先生の文章は、読み手を引き込む魅力を持っている。通常の教科書を読んでもわからない、



表現しにくい手術のコツや、合併症の対応などに関して、清水先生とともに手術に参加し教わっているように錯覚するのは私だけではないと思う。

学術出版物の企画に新規性がないと言われてかなりの時間が経つが、本書はそのような状況に風穴を開ける役割も果たしてくれると思う。ジャンルを問わず乱読する癖がある私は、気にいった本は何回でも読んでしまう。本書『脊椎外科書』はそのような対象となる名著である。

A4 156頁 2013年
定価 7,875 円(本体 7,500 円+税)
南江堂 刊